

小1プロブレム対策を考える2

— 保護者サポーターから見たS市すこやかプラン2 —

高木 友子^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

首都圏S市A小学校で小1プロブレム対策のために行われている「すこやかプラン」は、実施3年目を迎えた。筆者は2年目から保護者サポーターとして小学1年生の様子とサポートの成果を観察している。同じプランを実施しても、入学時の児童の発達状態やサポーターの状態によって成果は異なった。生活習慣の面では約1か月のサポートを経れば殆どが自立できたが、学習に必要な力は前年度に比べると不足していた。学習の基礎となる力を養い、サポートすることが必要である。2年次以降前年度担任教員が学年全体を見通し、指導していくことも有用と思われる。

【キーワード】

小1プロブレム すこやかプラン 保護者サポーター

1. 問題

「小1プロブレム」とは小学校新入学児が「学習に集中できない、教員の話を開けず、授業が成立しない等」（東京都教育委員会,2008）の状態であり、具体的には授業中に立ち歩いたりなど授業の妨げとなる行動をとる児童が一人ならず見られ、教師がその対応に手を取られたり、問題行動をとる児童に他の児童が気を取られたりして、授業が成立しない状態を言う。

小1プロブレムは学級崩壊と区別されなければならない。学級崩壊は、比較的高学年児童の意図的な教員への反抗から行われるものが多く、担

任教員の力量が反映されるが、小1プロブレムは小学1年生の小学校の教育形態への不適応から生じ、教員の力量には関係なく、児童に反抗の意図はなく、起こるものとみなされている。

2007年から2009年の調査では2割以上の自治体や公立小学校から、小1プロブレムの発生が報告されている（月森, 2013）。

小学校の現場からの声や、調査報告を受けて、小学校はもちろんのこと、小学校へ子どもを送り出す幼稚園や保育所でも小1プロブレムへの対応が考えられつつある。

小1プロブレムの問題は、幼稚園・保育所の保育形態と小学校の教育形態が大きく異なり、その差異に子どもたちが不適応を起こすことにより生じる。文部科学省も厚生労働省もその点に注目し、幼保小の連携について保育・教育の現場での対応

<連絡先>

高木 友子 takaki@shohoku.ac.jp

を求めている。

しかし、立地の問題から、一部の幼保小を除き、日常的な連携は難しく、行事の共有や、入学を控えた園児の学校見学など、時間的にも内容的にも非常に限られた試みが多く、また、特に都市部を中心に各園から進学する小学校が1校とは限らないため、必ずしも進学予定の小学校との連携事業を経験できない場合も少なくない。

幼稚園も保育所も元より小学校入学の準備教育をその役割として担っているため、各園にて入学前指導は行われているが、小学校との教育形態の差異、それに適応するのに必要な力とそれを身に着けるための指導の認識はいまだ十分とは言えず、小1プロブレムの全面的な解決には至っていない。

小1プロブレムの発生現場である小学校では様々な対応が実践されている。幼保小の連携による入学準備もそうだが、文部科学省は2011年度より小学1年生、2012年度より小学2年生の35人以下学級を実現させ、入学後少人数学級で児童の適応を図っている。保育要録による児童の情報交換も義務付けられるようにはなったが、有効活用に足る要録がどれだけ作成されているか、それがどれだけ活用されているかは、定かではない。小1プロブレムへの効果的な対応として、授業時間の柔軟な使用、補助教員もしくは支援員、ボランティアの配置、座学だけでなく「動的」な要素を授業に多く取り入れること（月森）、年度途中のクラス再編成などの方法が自治体や学校により採用されている。

首都圏S市A小学校では2011年度より「すこやかプラン」と名付けた小1プロブレム対策を導入した。筆者は2011年度、新入学児保護者として自身の子どもと同学年の子どもたちの姿を通し、「すこやかプラン」の成果を観察し、2012年度は保護者サポーター（ボランティア）としてプランに参加

する機会を得、現在の小学1年生の状況と保護者ボランティアを中心とした小1プロブレムへの対応とその成果を報告した（高木、2013）。A小学校は2013度もすこやかプランを続行し、筆者は保護者サポーターとして参加する機会を再び得た。本稿ではA小学校すこやかプランの3年目の実施状況と成果を保護者サポーターの立場から観察したものを報告し、考察する。

2. S市「すこやかプラン」について

(1) A小学校概略

S市は首都圏に在る政令指定都市である。人口は約70万人。A小学校は、都内ターミナル駅より私鉄急行列車で約30分ほどのところに位置する駅から徒歩15分ほどのところ、商業地区にも近い住宅街の中にある。元より駅前の商業区は比較的にぎやかな地域であり、都内への通勤の便もよいことから、最近までマンションや戸建て住宅の新築も増え、住民が増加してきた地域である。A小学校の現在の在校生は約700名。2011年度、2012年度の新入生は4クラス編成であったが、2013年度は140名を超え、5クラス編成となった。

(2) 「すこやかプラン」内容

A小学校によれば「すこやかプラン」とは「幼稚園や保育園で小さな集団に慣れてきた新入児に対して、小学校での集団生活や学習形態などに自然にとけ込めるように支援するプランのこと」である。2011年度より実施され、本稿の報告対象となる2013年度は実施3年目となる。

「すこやかプラン」の具体的な実践の内容は次の4項目にまとめられる。

- ① 4月の仮クラス編成を経ての本クラス再編成
- ② 仮クラスにおける担任候補者の交代制と学年内チームティーチング

- ③ 本クラス編成後第1週(おおむね5月第2週)までの保護者サポーターによる児童支援
- ④ 5月第2週まで学年朝会を毎日実施
- 実施内容の概略はほぼ前年度通り(高木)であるが、若干の変更点を含み、以下に述べる。
- ① 4月中は誕生日順に仮クラスが編成された。4月中の児童の様子を考慮して2012年度まではゴールデンウィーク明けに本クラスが編成されたが、2013年度はゴールデンウィーク中から移行した。
- ② 4月の仮クラス期間中、2011年度は3日毎、2012年度は2日毎、2013年度は入学式後2週間は2日毎、第3週目は1日毎に担任が交代した。
- ③ サポーターとして参加できるのは2学年在校生から前年度卒業生までの保護者である。2012年度は14名がサポーターとなり、約半数は2年目のサポーターであった。2013年度はボランティア開始時のサポーターは9名、内経験者3名のみであった。児童数が増えたにも関わらず、サポーターが減ってしまったため、人手が足らず、途中からサポーターが過去の参加者や知人に声をかけ、最終的には15名(内経験者5名)の参加となった。職務内容は、児童が昇降口に到着したところから、下校時登校班が出発するまでの、児童の生活と学習の支援である。具体的には、挨拶の手本となり、靴箱やロッカーや机の中の物の整理を手伝い、教室移動やトイレに付添い、給食配膳を援助し、着席したり、授業に集中したりすることが難しい児童を支援する。2012年度までは児童の在校時間すべてがサポートの対象となったが、2013年度はサポーターの負担軽減のため、サポートの対象は登校から朝の授業準備までと給食から下校までという変更の申し出が学校からあった。しか

し、実際には授業中のサポートの必要がないわけではなく、サポーターが自主的にサポートに入ったり、担任から授業サポートの要望が出たりした。シフトはかなり緩やかであり、各人可能な日時参加する。予めシフトを組むのではなく、毎日、サポートに来られたものが、援助の必要性の高そうなクラスから順次入り、それをサポーター控室のサポーター名簿に記した。

また、サポーター控室には記録ノートが置かれ、サポーターはその日特に気になった事柄を記し、教員やサポート同士の情報交換を行った。

サポーターは学校から貸与されたそろいの生成りのエプロンと名札をつけた。

- ④ 本クラス編成後1週間まで(5月第2週頃まで)1年生全員が特別教室(行事時には体育館)に集合し、手遊びを含む読み聞かせ、歌の練習、教員からの話などを行った。日によるが正味2~30分程度のプログラムであった。

3. 保護者サポーターの職務内容詳細

保護者サポーターの職務内容も高木(2013)とほぼ同じである。

登校時の挨拶、昇降口の児童の流れの整理、靴の履き替えや傘の片づけの援助。

教室での机やロッカーの整理。名札の安全ピンを止める援助。

トイレや教室移動の付添い。児童同士が騒ぎすぎたり、暴力的なトラブルが生じたりしないように援助する。

体育時の着替えなどを含む、授業に使う用具の準備が自力でできない児童の援助を行う。長時間着席していることが難しい児童、授業の内容や教員の指示に注意を払えない児童の注意を促す。

給食の配膳、下膳の援助を行う。

清掃時の指示と援助を行う。

下校時の荷物のまとめを援助し、整列を促す。

4. 2013年度経過

昨年度（高木）と同じ時間帯、場所のサポートに必ずしもつげなかったもので、観察できたものは必然的に異なる。

今年度も登校時の昇降口のサポートに携わることが多かった。前年度同様に最初の2週間は混乱を極めるが、それを過ぎるとやや落ち着き、援助の必要性は少なくなった。最初の2週間の問題は前年度に同じく、狭い場所でランドセルを背負ったまま立って靴を履き替えることができない児童が複数おり、それらが座り込んだり、荷物を広げたりして他の児童の通り道をふさいでしまうこと、また、入学式後数日すると子どもたちの友人関係ができてきて、友人を待ったり、会話したりして、やはり通り道をふさいでしまうことにより渋滞が起こることにある。

昇降口の援助にあたる分、同時時間帯の教室のサポートには携われず、前年度目立った名札付けや学用品の片づけの困難については観察ができなかった。

昨年度、最後まで援助が必要であった集会時の整列は学年集会の場所が2倍の広さの教室になったため、今年度は早期に解決した。昨年度、状況が最後までなかなか改善しないことを環境設定の問題とした高木（2013）の推測通りであったと言えよう。

朝会の内容については大多数の児童は時間の経過と共に集中できるようになっていったが、今年度は非常に私語が目立つ児童がおり、それに影響を受けて、私語が広がってしまう現象がサポートの最後までおさまらなかった。

授業では、平均月齢の一番低いクラスではあったが、教員が一度に二つ以上のことを指示すると約三分の一の児童が指示を理解できなかったということがあった。教員は児童の発達状態にあった指示を配慮する必要を感じた。また、ページを指定して教科書を開くよう指示されても、数量の検討がつけられないのか、教科書の反対側から1ページ1ページめくっていくという行動が複数の児童に見られた。（ちなみに指示されたのは5～6ページを開くことである。健常な就学児童にとって検討をつけるのが非常に難しい数量ではないだろう。そうだとすると、一般的な発達理解以上の配慮が必要と考えられる。）これも平均月齢が低めのクラスで観察されたことだが、算数ドリルの問題の指示が理解できない児童がサポート後期になっても4～5名いた。クラスによっては本クラスになっても教員の指示が半分程度の児童にしか伝わっていないことがあった。しかし、他のクラスでは教員の話にクラス全体が集中している様子も見られ、状況はクラスによってかなり異なった。

クラスでの着席時、椅子の背によりかかるような姿勢になってしまい、机に正しく向かえない児童が少数ではあるが見られた。A小学校では防災頭巾を座布団として椅子に着けることが義務付けられているが、このサイズが合っていなかったり、ゴムや紐の長さがあっていなかったりすると、座布団や体が前に滑ってしまい、きちんと着席することができないようであった。

校庭での話では座って地面に手が届く状態になると、砂をいじる行為が散見され、教員の話には集中できない児童が少なからずみられた。また、前年度は観察できなかった場面だが、体育などの隊形変化が児童らには大変難しいようで混乱していた。列が乱れてしまうと、自分がだれの後ろに並んでいたのか、などもすっかり覚えられていないことがあった。

前年度は筆者の目にはあまり見られず、今年度は目立ったこととして、鉛筆の持ち方の誤りがある。正しく鉛筆が持てない児童が多く、クラスによってはサポート終了時でもまだ4分の1の児童が持ち方を直せていなかった。一方でほぼ全児童が正しい持ち方になっているクラスもあり、推測ではあるが、教員の指導によって差が生じたかもしれない。昨年度、誤った鉛筆の持ち方が目立たなかったのは、入学前から児童の技術が高かった可能性も考えられるが、昨年度はサポートの量が人数的にも時間的にも今年度より豊富であったため、支援が十分に行き届いた結果という可能性もある。

トイレへの移動の付添は教員から求められたが、支援はほとんど必要なかった。ハンカチは前年度より持参できているようであった。

給食の配膳への慣れは順調で、サポートが終了するまでには、教員の指示援助で配膳を行うことができるようになっていた。

清掃では、机を移動させる、雑巾を端から順にかけるといった手順を、クラス全体で整然と行うことは難しく、援助を必要としたのは前年度と同様であった。

下校時、地区ごとに呼び出され、外に整列するのだが、順番の遅い地区の児童は静かに待っていることが難しく、動き回ったり、それにより児童同士のトラブルが生じることもあり、サポートを必要とする場面であった。

月森によれば、教員と保護者の児童についての情報交換は小1プロブレム防止と解決に有効であり、連絡帳や個人面談、電話の活用の他、保護者が学校に迎えに行くことも勧められている。A小学校では1年生の入学後暫くは学童保育利用児童以外は保護者の迎えが求められているが、サポートの必要頻度の高い児童であっても迎えの機会にその状況を教員が保護者に伝える姿は観察されな

かった。しかし、保護者の求めに応じて連絡帳や電話などでの情報交換はなされているようであった。

前年度より目立った現象として、子どもの同士の衝突がある。前年度も活発な男子を中心にトラブルの多いクラスが観察されたが、今年度は男女を問わず、少人数での衝突が学年全体に散見された。

また、数は少ないが、体調不良を訴えて来る者が前年度より多かった。実際に発熱したり、けがをしている児童もいたが、おそらく実際には不調ではない、もしくは対応を求めるほどの状態ではない（軽い口内炎など）のに甘えて教員やサポーターに不調を訴える児童が期間中各クラス1～2名程度見られた。教員もしくはサポーターの注目を独占し、場合によっては保健室まで付き添ってもらえると明らかに嬉しそうに元気を取り戻す児童もいた。

そして、更に数は少なく、学年全体でも2～3名だが、本クラス編成後、教室に入れなくなったり、帰宅したいと訴えたりする児童が見られた。昨年度も登校時の登校しぶりなどは観察されたが、校内で長時間にわたる拒否状態は今年度の方が目立って生じていた。

1名の児童が入学時から支援級に在籍し、普通学級に通級していたが、それ以外にも生活能力や理解度にかなり遅れがあると思われる児童も見られた。また、行動そのものに援助を必要とするわけではないが、速度が非常に遅く、級友と同じタイミングで行動することが非常に難しい児童も見られ、それらの児童の状況はサポート終了時まで改善はあまり見られなかった。

5. 2012年度のとの比較

前年度（高木）同様、身支度や物の整理、配膳、片づけなどは1か月程度の間、サポーターの支援を必要とすることが少なくなかったが、約1か月を経過する時点で殆どの児童が自立できていた。他方、サポート終了時に前年度に比して、教員の話に集中できない、指示内容を理解できない、鉛筆を正しく持てない、体育などの隊形変化が理解できないなどの学業に関する事柄を十分に遂行することのできない児童が目立った。また、子ども同士の衝突、数は少ないもののサポーターへの甘え、教室に入れられないなどの校内での不適応状況が前年度に比べ、目を引いた。これらの原因として、入学前時からの児童の発達状態が未熟であった可能性も考えられるし、また、今年度、児童数の増加に比べるとサポーターの数と参加時間が十分でなく、前年度に比べると支援が薄くなってしまったため、とも考えられる。昨年度は授業時間内も各クラスに複数のサポーターを配置できることが多かったが、今年度は前述の通り、サポーターの負担減のため、学校側からは授業中はサポート不要の指示があり、実際、全日サポートに入れるサポーターは少なく、授業時間帯はクラスにサポーターが一人もいないということも多々あった。

また、前年度は本クラス編成時にサポートを必要とする現象が各クラスに分散し、少なくなり、落ち着く様子が見られたのに対し、今年度は本クラスの少なくとも開始時点ではクラス毎の偏りが大きいように見受けられた。

6. 2011年度、2012年度プランのその後

高木の報告で、小学校への適応は小学1年生に対応するだけでよいわけではなく、2年生以降でも十分な対応がなされなければ、問題は生じるの

であり、A小学校でも1年生での対応が2年生以降生かされず、2学年以降で問題が生じたことを指摘した。

2013年度は、第2学年も第3学年も、前年度担任が1名ずつ新学年に引き継がれた。第2学年に関してはその教員が主任教諭となり、筆者が他のボランティアでかい間見たところや、他のボランティアたちの報告によれば、前年度に引き続き学年全体が落ち着いた様子である。

第3学年に関しては既に第2学年で学級崩壊ともいえる状況が1クラスで生じていた。第3学年に前年度担任が1名残ったが、第2学年の連続担任のように主任ではない。この3学年担任のクラスは現在までのところ落ち着いた様子であるが、他の1学級は学級崩壊状態となっている。ただし、問題の中心的な児童は2学年時とは異なる。2学年時に学級崩壊の中心と見られた児童たちのうち、今年度は落ち着いている者もいるが、担任の努力で授業不成立など学級崩壊までには至らないものの、落ち着かない状況が続いている者もいる。

第2学年の安定した状況を見ると、前学年に関わった教員が、新学年で学年全体を見通せる職に就くことは学級崩壊の予防に有効と思われる。第3学年の状況を見ると、ただ前年度経験者が担任として残ればよいわけではなく、新学年担任間の情報共有と協力が図れる体制が重要であろう。

7. 全体的考察

2年度にわたり、すこやかプランに保護者サポーターとして参加・観察した結果を見ると、学校が同じプランを実施しようとしても必ずしも同じ成果が得られるとは限らないと言えよう。

成果の違いを生む要因として、一つは入学前時の児童の発達状態の差が考えられる。2011年度から2012年度のサポーターを務めたボランティ

アたちから、2012年度入学生は2011年度入学生よりも入学当初より落ち着いていたという大まかな評価が得られている。3年度連続のサポーター経験者は1名のみであり、コメントを得られていないので、3年度の比較は行えないが、2012年度の達成度の高さはそもそも入学時の発達状態の良さに起因している可能性はあるかもしれない。

もう一つにはサポートの量と質の違いである。児童数、学級数が増加したにも関わらず、2013年度サポート開始時のサポーターの数は前年度より少なく、その後、増えても前年度より1名多いだけであった。また、1名あたりの参加時間も前年度より短く、学校からの申し出もあり、授業時間帯のサポートは前年度に比べ極端に薄くなり、全クラスには行き届かなかった。人手が足りないと同時に、前年度サポーター経験者の比率も少なかったため、サポートの質にも影響していると思われる。

成果が少ないと思われる今年度でも、約1か月のサポート期間を経ると基本的な生活習慣については殆どの児童が自立できるようになった。伊藤ら(1997)や盛・尾崎(2008)が「基本的な生活習慣」、「身辺自立」、「自己コントロール」の力を獲得することが入学前に期待され、小学校生活への適応を促し、小1プロブレムの予防につながると考えられると指摘していることを踏まえ、高木(2013)も小1プロブレムの予防としてこれらの力を入学前に身に着けることが期待されることと、生活面を入学時にサポートする必要性について述べた。生活面は学校適応のために必要な力ではあるが、今年度の成果を見ると1か月のサポートがあればかなりの度合いで達成できた。しかし、それだけでは学習面の適応まで保障できない。入学時に生活習慣や身辺自立がもっと達成されていれば、学習面へのサポートを強化できるかもしれないが、A小学校に関しては学習面でのボランティアのサ

ポートを学校として位置づけられていないようである。

「集団で話を聞く」力を育てる必要性は、小1プロブレムの予防に関して必ず取り上げられているが、小学校での学習を保障するためには、「話を聞く力」をはじめとして、小さくは鉛筆など文具を適切に使用する技術まで、学習面に直結する力を入学前後、幼稚園・保育所・家庭そして小学校でより意識的に育てていく必要を感じた。

また、月森をはじめ、多くの現場教員や研究者が指摘していることではあるが、幼稚園・保育所から小学校への環境が大きく変化した子どもたちは心身共に疲労し、不安が強くなる。十分な休息が必要であるにも関わらず、大人中心の生活で寝不足で登校する児童も見られた。サポーターへの甘えや学校への不適応を示す子どもの多さに家庭でのサポートの重要性を感じる。入学児童の実情を保護者に発信し、今以上に協力を得ていくことも小1プロブレムの予防と解決には欠かせないと思われる。

8. 今後の展開

高木(2013)では数量的なデータへの期待に触れたが、サポーターとしての業務を行う中での調査なので、数量的データの収集は困難であり、今回もエピソード的報告に留まった。

2013年度で、すこやかプランは3年目の実施となり、実施見直しの可能性も出てきているようである。

プランとボランティア参加の継続が可能であれば、小学1年生入学時の状態と適応過程、サポートの成果について記録を続けていく。

謝辞

昨年度に引き続き、教育サポーターの活動に参加の機会を与えてくださったA小学校の先生方、ならびに児童の皆さん、また、ともに活動した新入生サポーターの皆さんに心より感謝申し上げます。

引用文献

- 伊藤輝子・山内昭道・岩崎洋子・細川かおり（1997）「幼稚園・保育園・小学校の教育連携の実態と課題—来年度就学予定児を持つ保護者の不安に対する保育の課題—」保育学研究 第35巻第2号 136-143.
- 盛真由美・尾崎康子（2008）「幼稚園から小学校への移行における適応過程に関する縦断的研究」富山大学人間発達科学部紀要 第2巻第2号 175-182.
- 高木友子（2013）「小1プロブレムを考える—保護者サポーターから見たS市すこやかプラン—」湘北紀要第34号 41-50.
- 東京都教育委員会（2008）「東京都教育ビジョン（第2次）」
- 月森久江（2013）「『小1プロブレム』解決ハンドブック」講談社

How to solve the First-grade Problem 2 - Thinking about the S-City Sukoyaka Plan 2 -

Yuko TAKAKI

[abstract]

This is the second report about the Sukoyaka Plan to solve the First-grade Problem at A Elementary school near the Capital City. The school tried to apply the same plan as one applied last year, but got less effect. Children's development or Parents supporters' states might make it. About a month support gave the children skills for school life but basic skills to study. We need to develop such two types of skills. It is useful that teachers care for the children for more than two years.

[key words]

The First-grade Problem, Parents Supporters, elementary school